

外地での体験

引き揚げ

忘れ得ぬ日々―私の戦争体験記―

M・Eさん 61歳

撰津市香露園

今もなお中国に残留孤児と呼ばれる多くの人びとが、肉親を求めて望郷の思いに沈んでいます。これらの人びとの悲痛な叫びを聞くと、胸がつまる思いがします。それは、私も旧満洲から子供を連れて帰って来た体験を持つものだからです。

思えば四十年の歳月を経た今も、あの頃の悲惨な状況がまざまざと甦ってきます。当時私は、南満洲の安東市（現在の丹東）に住んでいました。夫は終戦の年の四月に応召になり、まだ二歳になっていない息子と二人で終戦を迎え、敗戦の混乱期を過ごし、翌年十月に安東を出発、引き揚げました。私は命令による正規の引き揚げですから、北満の開拓団の人ほどの苦労は

していませんが、それでも安東から引揚船に乗る葫蘆島までの行程なら、汽車で一昼夜位で行ける所を、途中鉄橋が破壊されていたため、徒歩とぎゅうぎゅう詰めは無蓋車に揺られて、一箇月もかかって漸く葫蘆島にたどり着くと言う大変なものでした。

幼な児を背負って何日も空腹と疲労に耐えながら、自分の体力と気力だけで歩き続けるのですから、今考えてもよく無事に子供を連れて帰って来れたことと思います。

残留孤児となられた人は、開拓団など北満に住んでいた人が多いのですが、北満の人はソ連参戦の日より我が家を追われ、山野をさまよいながら、飢えや病に倒れ或は殺されたりして、多くの人びとが無念のうちに死んで行きました。また、混乱の中で食べる物も無く、明日の生命もわからず、せめて子供だけは助けたいと手放した人も多

かったと聞きます。思うに、死んだ人も残った人もすべては戦争の犠牲者なのです。今も地球上の何処かで戦争が起きていますが、戦争はすべての国民を犠牲にします。私は、今日の日本の平和な日常を喜び、この平和がいつまでも続くことを願うと共に、さらに広く世界の平和を祈らずにはおられません。

すべての人が再び悲惨な目に遭うことの無いように、ささやかながら私の戦争体験を短歌につづり、永遠の平和を願いたいと思います。

夫は征く

四月よっつき後に敗戦あるをつゆ知らず

補充兵なる夫つづまは出で征く

唐突に赤紙が来て夫は征く

幼なき吾子とわれを残して

奉公袋ただひとつ持ち手を振りて

さりげなく征きしあの日の別れ

いつの日か生きてま見えんわが夫と

思えば悲しかかる別れは

夫の姿小さくなりて消ゆるまで

見凝めていたり吾子抱きしめて

国敗る

はるかなる記憶となりてなお残る

敗戦の民となりて過せし満州の日々

国敗れ異国となりたる満州に

ひと日の生命いのち惜しみて生きき

一瞬に異国となりて堪え難き

日をひたすらに生ききし若き日

焼き打ちの炎は山を伝い来て

われに迫りぬ敗戦の夜

人影におびえる吾子の口を塞ぎ

堪えし日幾日あり夫は帰らず

声をひそめ体こごめる仕草身に着きぬ

幼なき吾子は兵に怯えて

怯えつつ堪えつつ生きたるかの夏は

遙けくなりて鳳仙花咲く

再びは見ることも無き我が家の

すべてを心にとどめ出で行く

引き揚げの道

広き部屋にリュック一つが残りたり

去りゆく日まで夫は帰らず

帰り来ぬ夫が形見に大島の

軽きを選びて我が荷に納む

黙々とただ歩み行く列つづく

帰国の想い胸に秘むれば

隊列に遅れじと歩むわれの後ろ

銃持つ兵のほかは人無し

故国こくにの土踏む日夢見つひた歩む

肩にくい入る重みに堪えて

背負いし児の無事のみ願ひたすらに

幾日歩めり我を忘れて

背負いたる児の呼吸いき確かめ確かめつつ

ひたすら歩む長き山坂

背は重くあとずさりしつ這い登る

小さき木の根握りしめつつ

逃げまどい飢えに苦しみ吾子の名を

呼びつつ死にし人や幾千

吹雪舞う葫蘆島沖にくろぐるど

我らを運ぶ貨物船見ゆ

リュック背負う人の群消えたる岸壁を

引揚げ船は音無く出でぬ

大陸に悲喜こもごもの若き日の

すべてを灼きて陽は海に没つ

凍りつく土にいまなお埋もれいる

友に捧げん鎮魂の歌

私の生きた戦中戦後

H・Aさん 48歳

摂津市一津屋

昭和十九・二十年と言えば、国民学校一・二年の頃であった。当時私の家族は朝鮮忠清北道の田舎で、父は特定郵便局を営み、九人家族で生活していた。

戦時中は、日本のような激しい空襲は全くなかったが、たびたび学校からの日の丸の旗を持って、近くの川の船着場へ出征される兵隊さんを見送りに行った。若い兵隊さん達が軍靴の音を響かせ、私達の学校に来て宿泊し、いろいろの訓練をしていた。また、それぞれ家では防空壕が掘られていて、その周りにはヒマシ油の葉が繁り、外から分かりにくくしてあった。

ときどきB 29が飛来すると、塀づたいに身をかくして急いで逃げ込み、両手で防空頭巾をしっかり押え、敵機

が通過するのを息をこらし、じっと待っていたことがあったが、幸いにも爆撃を受けたことは一度もなかった。学校は朝鮮の子供と共学であった。ほとんど勉強をした思い出がなく、田植えの時期には低学年の私達も、近くの農家に勤労奉仕で田植えの手伝いに行った。大きなヒルがたくさんいて手や足に吸いつき、みんな大騒ぎして逃げ回った。夏休みには飛行機の油にする松根（抜伐した松の木の根）を掘りに、兄達と一緒に山に行き、大変苦勞して何株も掘りへとへとになって帰ったこともあった。

お国の為と言うことで誰も嫌だと言えなく、真実を国民に知らされない時代であった。幼い私達が一生懸命松根を掘っていた頃、日本では広島や長崎に原爆が投下され多くの尊い命が失われていたことを思うと、何故日本はもつ

と早く戦争を止める勇氣を持たなかったのかと悔やまれてならない。

それから間もなく、一週間程過ぎた昭和二十年八月十五日、日本が敗れたことを父から知らされた。その時家に居た朝鮮の人も、母も兄達もみんな泣いた。私は、戦争に敗れたと言うことがどんなことなのか深い意味が解らなく唯ぼかんとしていた。翌日、父の部下として働いていた朝鮮の人が来て、日本は敗れたのだから早く日本に帰るよう、毎夜、日本刀を片手に脅しに来るようになった。母と私たち子供四人は夕方になると、近所の朝鮮の知人の家に逃げて泊めてもらい、翌朝、自宅に戻る毎日が続いた。その間、父と大きな兄二人は、日本刀を持った朝鮮人の前で正座して早く日本に帰るよう脅され、兄達は本当に恐ろしかったと言っていた。

これも戦争がもたらした悲劇で、昨日まで仲良く一緒に働いてきた友人と、こんな姿で向かい合わなければならなかった父の心中は、無念さでさぞ辛かったことと思う。

やっと十月の中旬になって引揚げの準備が始まり、日本に持って帰れる荷物は、大人も小人も南京袋一個という制限であった。そのため、ほとんどの家財は置いてこなければならなかった。引揚者収容所に着いた時は、各地から集まって来た人達で大混乱だった。特に、子供の着ている物や履いている物は、うっかりしていると取られてしまう有様で、私も母が作ってくれた「もんぺ」とぞうりを取られ、母がすぐ気づいて追いかけて「もんぺ」は返してもらったが、ぞうりは見つからず、知り合いのおばさんの大きなぞうりをもらってはいいた。釜山港（日本への船が着く港）へ行く列車は、牛馬を運ぶ貨車であった。

乗り込む時も幼い子供達は、まるで犬猫のようにポンポンと中に投げ込まれ、泣きわめく声で大変であった。とにかく、帰国船に乗り込むまでは、寒い倉庫で身を寄せ合って眠り、何時までたつても進まない長蛇の列で、みんな腹をすかしながらじっと我慢して待っていたことやそのような大変な中で、みんな病気をせずに無事帰ってこれたことを思う時、両親の苦勞はいかばかりであったことか。山口県の下関から名古屋までの汽車は、窓から出入りする者等鈴なりの乗客で、トンネルに入る度に灰煙で息がつまる程苦しかった。みんなすすだらけの顔になって、ようやく名古屋に着いた時は日はとつぷりと暮れていた。

私たちは疲れた足で三重県の桑名へと向かった。父の故郷は桑名から三十キロも奥に入らねばならず、訪ねた親戚も焼けてなく、父や兄達は一夜の宿

をさがしに行ってくれた。しばらくして戻って来た父は、「厚かましいけどみんな世話になろう」とその民家に行く事にした。見ず知らずの私達を快く迎えてくれて、貴重なお米で真白い御飯を炊き、大根のおつけものを御馳走になった。こんな食事はしばらく口にしたことがなかっただけに、ホッペタが落ちる程おいしかった。

日本中が暗くて辛い混乱の中にあつて、両親は五十歳にして人生の再出発をしなければならなかったことは容易ではなかっただろう。私達家族は、このような心温まる出会いがあり大変勇気づけられ、その後の大きな支えとなったことは間違いなかった。

帰郷後は本当に食物に困った。お腹がすいたら水を飲んで空腹を満たし、時には米ぬかの焼いたのを食べたが、どんなにお腹がすいても食べづらかった。配給のさつまいもも、食べ盛りの

我家では足りなく、父は毎日リュックを背負って隣り村まで買出しに出た。

母も人に貸していた畑を返してもらい、さつまいも、麦、大豆とあらゆる農作物を作り、懸命になって働き私達を育ててくれた。

収穫があるようになって少しは楽になったが、私が六年生の頃でもまださつまいもを弁当に持っていかなければならなかった生活であったから、苦しい食糧難は五、六年は続いたような記憶がする。

— そのような貧しい生活の中で卑屈にならず、心豊かに育つことができたのは、やはり父母が生きるために一生懸命働いてくれたこと、そして私達も父母のそんな姿を見て、農作業と家事の手伝いをして父母に喜んでもらうためにがんばったことが大きな原因だと思う。戦中戦後、耐乏生活を強いられ、子供と弱者を巻き込んで尊い命を奪い

合う戦争に強い憤りを覚えると共に、築き上げた平和が未長く続くことを心から願っている。

母の体験

K・Tさん 39歳

摂津市鳥飼中

母は大正十年二月生まれ（六十四歳）。開原幼稚園、鉄嶺小学校、奉天商業卒業後、国際運輸（株）奉天本社に入社。二十二歳で警察官の父と結婚。翌年長男出産。昭和二十年十月「動乱の中」で長女の私が生まれた。私がこの世に生を受け、現在二人の子供の母として家庭に恵まれ幸せに暮しているのも、強く逞しい父と母の「強い愛」があったからである。

生きて本国の土を踏むことができないかどうかという動乱の時、生まれて数カ月の私をリュックサックに入れ、底を左右切り抜き、両足が出るようににして、母は首からつるして私を連れて帰って来たそう。幼い頃から戦争の体験や引揚げ者の苦労話を聞かされ育った。

今回のこの体験談は両親への恩返しのためにも協力してもらって筆をとったものである。祖父の満鉄駅長時代、父が満州での警察官としての任務、駅長の娘、警察官の妻、戦争で幸せから、どん底の生活に、その苦労を書かせていただく。

母の人生で一番楽しかったのは、小学校四年生だったと言う。当時私たちは鉄嶺公園の前の満鉄社宅に住み、夏はプール、夕方になると公園の池の蛙がコーラスを始め、西の空が真赤に染まり、それは美しい満洲独特の情景だった。夕暮れ時になると、中国人上流家庭の旦那さまだろうか、黒の長い支那服に黒のお碗を伏せたような帽子をかぶり、両手を後に組んでクルミを手の掌でカチカチと鳴らしながら、蛙の鳴く池のほつりをよく散歩していたそう。池の南側には小高い山が作られ、秋には紅葉し目が覚めんばかりだった。

冬は零下二十度の銀世界。屋内では卓球、屋外ではスケート。母は今でもとてもスケートは上手である。夜九時には、守備隊の消灯ランプが遠く淋しく聞こえてきた。何とも言えない郷愁の思い出になっていくそう。五年生の九月十八日、突如満洲事変が勃発し、今まで自由に登下校していたのが、その時から地区毎に集団登下校するようになり、不安を感じる日々だった。五、六年の時、負傷した兵隊を積んだ列車が通過する時は、授業を中止し、鉄嶺駅までクラス全員と先生が日の丸の旗を持って出迎えに行く。負傷兵がぞくぞくと下りてビッコを引いたり、重傷者は汽車の窓からタンカで車外へそして鉄嶺の陸軍病院へ運んで行く。開原の親戚に遊びに行った時、網戸越しに拳銃の玉が飛んで来て、近所中が大騒ぎ。また匪賊が出たとのこと。匪賊と日本警察隊との戦いだ。匪賊は

どんどん郊外の高梁畑こうりやんの方に逃げて、その後を警察隊が分れて追って行く。高梁畑の上から煙が上がる。母は生まれて初めて目の前で撃ち合いを見た。捕えた賊を郊外で一般民衆の前で見せしめに撃ち殺すのだ。

翌日、警察署の裏にズラリと並んだ匪賊の死体。ハダシの者、片足だけ支那靴を履いている者。上には莛むしらが一枚かぶせられていた。どうしてこんなことをするのだろうか？子供心に当時分からなかった。五年の時公主嶺（新京と四平街の間の町）で戦死した土田上等兵、その他勇敢に戦った将兵達の血まみれになった軍服や鉄かぶと、その他の所持品が鉄嶺の陳列館で陳列。スパイで殺されたあの有名な中村大尉。北満だったか蒙古だったか忘れたが、支那人の家屋に支那人になりすまし、敵のあらゆる行動や機密を日本軍に洩らしていた。それがバレて殺されたこと

を今でもよく覚えている。死んでもレコードにまで歌われた「義勇奉公四の文字胸にきざみてむちをあぐ……マスラオ中村シン太郎行手ゆくては遠し興安嶺」やがて満洲国が建国され、日本から日満親善交換の可愛らしい女の子の使節団が来満。母達、クラス全体が鉄嶺駅迄出迎えに行った。満洲国ができてからは、それは平和になったそう。母が奉天商業に入学して間もなく、日本で二・二六事件が起き、ラジオ、新聞を賑わした。

若い血気盛りの兵隊達が総理大臣、各大臣、将軍達の官邸を急襲し、要人が暗殺された事件もついこの前のように思い出される。卒業後国際運輸（株）奉天本社に入社。間もなくノモンハン事件や蘆溝橋事件ろこうきょう勃発。国際運輸社員や満鉄鉄道員は、在満居留民のために生命を投じて戦い抜いた。

皇軍将兵が強くとも弾薬あるいは他の食料品、軍事上必要な物資をスムーズに輸送守備するのが国際運輸社員の使命であった。現地社員や兵隊は炎熱下30度、また冬は酷寒零下30度もある北満の輸送警備に、戦火の巷ちまたに昼夜不眠不休で挺身的活動を続け、疲労過労その極に達してもなお、心身に鞭打って業務を遂行し、食するに適當なる食物も無く、満人苦力クワリ同様の物を食し、胃腐をこわしても医者も薬も無く、血便を耐えて東西に奮闘された社員、何一つ娛樂があるでなし、母達は何時も激励の慰問文を書いた。また北支南支の兵隊達にも千人針や慰問文を送った。奉天射撃場で実弾射撃の練習もした。射った瞬間ひどい衝撃で数日痛みが続いた。

戦火は拡大の一途をたどり、何時果てるとも分らない憎み切れないあのソ連兵の不法越境に対し、皇軍は断固

として反撃を加えても、ソ連飛行機は執効に満洲国内深く侵入し、日本全権大使松岡洋右は国際連盟を遂に脱退し、世界の国を相手に第二次大戦開始。真珠湾攻撃から戦火はいよいよ拡大。日独伊が三国同盟を結び世界の国と戦った。

親日派のチャンドラポーズ氏（インド）を日本の家庭にかくまった記事を読んだことも覚えている。食料衣類等すべて配給制になり、白米が大豆やその他代用品に替ったトウモロコシの粉、芋の粉でタンゴを作り主食とした。野菜の代りに芋づる、タンポポ、ノビル、ツクシ等まで食した。長男が生まれ着物の布地が一回配給され着物は一枚だけ。後は父の古着をほどき帽子、服を母が縫ったそうだ。数日後、祖父（平東駅長）が日本人だけ集めて「関東軍からの命令でここが戦場になる。明朝、朝鮮の平壤へ疎開するため四平街に集合。至急準備せよ」……

赤い夕日の大陸に

捧げる鎮魂の詩

H・Hさん 63歳

摂津市鳥飼西

地平の果てに沈むだろう

二、いく星霜を重ねても

心は残る遠い国

我が子我が孫同胞を

戦火の中にさらしては

ならぬ心を又誓う

王道楽土満州の

君等のねむる大陸に

ひびけ平和の鐘高く

中国残留孤児に想う

戦火の広野を西東

母の名を呼び泣きくれた

幼い昔の想い出の

かすかなきおくつなぎつつ

心こがした故国への

四十年の歳月は

かなしい遠い旅だった

たずねる母の故里に

こいしい母の胸はなく

涙かわかぬ胸をだき

帰る心は重たかる

日本に戦が終わっても

日本に平和が帰っても

この兄妹に幸の

平和の春はいつ帰る

一、あの日と同じ夏が来て

やけつく日射しにのみがえる

四十年の歳月を越えて

想いはまためぐる

大きな夢に青春を

かけて渡った大陸を

戦火に追われ西東

一人でも多くの友を祖国へと

肩をたたいて手をとって

祖国へ続く此の道を

屍しほつもるいく山河

夜露と消えし同胞の

無念の涙いまもお

平和のくらしのかたすみに

君等を偲ぶ夏が来て

もえる夕陽が今日も又

遅い春

I・Yさん 52歳

摂津市千里丘

今朝も、奉天市立宮前国民学校校庭に亡くなられた人たちの数がふえていました。

男の人は生まれたままの姿で、女の人は下着一枚だけ着けて、積み重なっています。凍土となる前に穴を掘り、葬ることはできませんでした。

学校も十月になって、北満から南へ南へと避難してくる人達の収容所に変わりました。南満とはいえ、ここ奉天（現在の瀋陽市）では十一月になれば霜が降り、十二月になれば雪になり三寒四温の気象で道路は凍結し、夜間は零下十度まで気温が下がります。着のみのまままで避難して来る人たちは、夏着で、冬着も寝具もないありさまで、学校の机、椅子で暖を取れるうちは、

まだ望みがありました。それが無くなれば唯、死を待つのみ、敗者の悲しい現実です。

亡くなっていく人たちが、生まれたままの姿で放置される！それは人間として耐えがたいことですが、生きて行く者が一枚でも自分の体にまとうことを、この極限の状態でだれも責めることはできません。

私が渡満したのは、昭和十八年。四年生の夏でした。

父が故郷（愛知県豊田市）を捨て、先に軍属として渡満。三年後に母と二人で父の許に行き、黒河省孫呉、チチハル。父の現地応召とともに母は父の隊に就職。そして部隊の南下に従って奉天に着いたのが八月十四日でした。翌日の玉音放送を聞いて、部隊の解散。幸いにして住まいも共同生活ではありませんでしたが八階建の台東ビルに入ることができました。もちろん電気はつ

きませんでした。ガス、水道は利用でき、引揚げまで頑張りました。

ソ連軍の南下、そして八路軍（現在の中華人民共和国軍）の北上。それを追って国府軍（現在の台湾軍）の追撃と、連日連夜、銃撃音のたえる日はありませんでした。

そのような中で十一月頃、国府軍が駐留し、やっと治安が安定してきました。学校も、空になった日本人の会社跡やビルを利用して再開されました。先生達は、「日本へ帰れても帰れなくても勉強だけは続けさせてやりたい」の熱意。でも、机も椅子もなく、各自で折りたたみの小さい椅子をもってきて、それが無い子は座布団、そしてカバンが机でした。みんな勉強できることが楽しく、うれしきで一杯。私達は幸せでした。ひもじくても家があり、学校だって通えたのだから。

避難者の人達は食料も家も布団も暖め合う火だつて少なかつた。日本人同志なのに助けることもできないもどかしさ。働いてお金を得る気持ちはあつても場所がない苦しさ。外地にいて敗者となつた人間のみじめさと、人の命の小さいことを知りました。

年明けと共に「避難者が中国人に子供を売っている」と大人から聞くようになりまして。子供心を傷つけられましたが、しかしあの極限状態の中で、子供だけは元気に育つてほしい、親はそのお金でもし帰れるとしたら、一日でも生きながらえたい、悲しい運命の始まりではあります、だからと言ってこの人達を悪人とは言えません。また「日本人の子供は頭が良いから子供拐いが多くなつた」と耳にすることもありません。

春の来るのを待つこともなく一月、二月、校庭は死者の山となつて行きま

した。どの人も胸の上で合掌しているのは少なく、何かにすがりたい思いで腕を上にあげていました。

そんなある下校時、中国人が上向きになつている女の人の下着を棒切れで取るのを見た時、思わず怒鳴つてしまいました。

「プーシー!! (止める!!)」

昭和二十一年三月十八日、やっと奉天も春らしくなり、道路の氷もとけ出し、父兄も同席しないささやかな卒業式が貸しビルで行なわれました。そして道路に面した玄関で、記念写真（不幸にして満州での写真は一枚だけしか持つて帰れませんでした）を撮るため並んだ時、女生徒の悲鳴で中断されました。あまりにも偶然で、ショックな出来事でした。

馬車に丸太や木材を乗せるのと同じように、積めるだけ積み上げられた「あの人達」が、無言で何台も何台も

私達が呆然と立っている前を通り過ぎて行きました。

「暖かくなる前にやっと郊外で茶毘にふされる」と先生から聞きました。「もう人目にさらされなくても、中国人に恥しい思いをしなくてもいいんだね」言葉に出さなくても見送つた学友達も同じ思いでした。

私はこの一枚の記念写真を見るたびに、春を待たずに亡くなっていかれた方々の冥福を祈り、骨と皮だけになつても日本の土を踏めたことの幸をかみしめています。

戦争体験者の私達世代が二度とあやまちを繰り返さないためにも「平和」と言う尊い遺産を守り続けるための礎となるべきと考えます。合掌。

戦後の苦難体験

A・Kさん 73歳

摂津市一津屋

四十年前の思い出したくない恐ろしい体験ですが、かわいい子や孫、日本中の、いや世界中の子供達に決して再びこんな悲惨な目に遭わせたくないという熱い願いをこめて、拙いながら書かせて頂きます。私の主人は岡山県の田舎の女学校の教師をやめて、広い新天地を求めて旧大連市の満州鉄道株式会社の中核試験所に勤めていました。終戦の年の五月初めに現地召集で出征し、一度だけ北満で陣地構築に働いているとの葉書が来ました。多分ソ連兵の来襲に備えるの事と思いましたが。それ以来何の音沙汰もなく、風の便りに終戦と同時にソ連に連行されたと聞きました。毎日空腹に耐えながら密林

を開墾させられ重労働で倒れる人も多かったです。

主人なき後の私は十才、七才、四才、一才の四人の子供を抱え、終戦後は収入の道も絶えて途方に暮れましたが、何としても四人の子供を飢え死にさせはならぬと必死でした。終戦後はB 29の空襲の恐怖がなくなった代わりに、警察もなく全く無防備の所に侵入して来たソ連兵や中国の共産兵や暴徒などの恐怖で夜も安心して眠れない日々でした。生活のために、主人や私の衣類や持物をびくびくしながら、毎日少しずつ満人街に売りに行つては食物に変えていきましたが、たびたび取られたりニセ札にだまされたりで一円にもならず、心の中で泣き泣き帰ったこともありました。また十才の長男は大福餅を、私はお豆腐を売ったりして苦労の連続でした。

その当時のいやな思い出の中に今も忘れられないことがあります。長男が道端で大福餅を売って帰ってきて「今日、日本人のおじさんが中国兵に追い回されてつかまり、ひどい目に遭って連れて行かれてかわいそうだった」と話をしてくれました。それから数日後、回覧がまわり「〇日〇時に大連神社において日本人を処刑するから一戸から一人集まれ」とのことでしたが、とても恐ろしくて行けません。人の話では、神社でなく裏の山で数人の日本の憲兵が銃殺されたとのことでした。またある時は一戸から一人ずつ呼び出されて、若い中国兵に追い立てられ、自分達の満人街を掃除させられたりして、敗者のみじめさをひしひしと感じたものです。

そしてやつと二十二年の一月に佐世保に引き場があることが出来ました。私と十才の長男は重い荷物を背負い、七

才の長女は一才の三男を背負つての長
い道中で今も思い出したくない難行苦
行でした。それでも生まれ故郷の日本
の土を踏める希望で最後の勇気をふり
しぼり、子供達を励ましてやつとの思
いで引き揚げましたが、私の実家には
兄一家が先に引き揚げていましたので、
広島県の主人の生家にひとまず落ちつ
くことになりました。けれど主人のい
ない生家には南米から帰った主人の姉、
母子六人が住んでいましたので、食糧
事情の悪い時に私共五人の突然の侵入
者が歓迎されるわけはございません。
予科練帰りの狂気じみた姉の息子に何
かにつけては当たりちらされ、いじめ
られ、酷使される我が子を見て見ぬふ
りをしなければならぬ私の胸の中は
はりさけそうでした。「みんな死んで
帰ればよかったのに」とまで言われ、
夜、子供達の寝顔を見ては一人で涙に
むせぶこともたびたびでした。

心の安らぐ暇もなく、早速生活を考
えなくてはなりません。大連で預けた
お金を一人千円ずつ貰えましたので、
当座は配給で何とか耐乏の生活ができ
ましたが、先が案じられました。上の
二人の子は学校に通わせ私は下の二人
を連れて恥も外聞もなく、慣れないお
百姓の手伝いや店番や物売りなどを
し、ただ主人の帰りを一縷の望みに必
死に働きました。けれどもその願いも
空しく、その年の五月に、待っていた
主人は私達の引き揚げより一年も前の
二十一年一月に、ソ連のビロビヂャン
収容所で栄養失調のため戦病死との公
報を手にしました。手にした時は一瞬
全身の血がさあつと引くの覚え、た
だ呆然として暫くは涙も出ませんでした。
主人もさぞ悔しかったことと思ひ
ます。

したが、四人の子供を見ては思い直し、
これからは子供の成長を楽しみにと頑
張りました。また不幸に追い討ちをか
けるように、通りがかりの不良少年に
放火され二度も裸になりまして、三十五年
の一月に大阪に勤めています長男を頼
つてこの地に来て、また一からやり直
して一生懸命働きました。お蔭で今で
は四人の子供もやつとそれぞれに家庭
を持って、小さな幸せに恵まれ孫も八
人もできまして、「やれやれ」とやつと
肩の荷を下しました時はすっかり老い
の身で役に立たなくなり、何かと皆様
のお世話になっております。

中国に取り残された気の毒な方々を
思うにつけ、私共みんな無事に帰れま
したことは何よりの感謝でございます。
ふり返りまして、私のような弱い何の
取り得もない者がこの大きな苦難を無
事に乗り越えることができたのは、
神様のご加護はもとより多くの方々

善意に支えられてのお蔭と心より感謝
いたしております。「なにとぞ世界中
の平和な幸せがいつまでも続きますよ
うに」と日夜祈っております。

